

Title	貨幣数量説に関する諸税
Sub Title	
Author	神戸, 正雄
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.3 (1913. 7) ,p.543(127)- 574(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註廿三、R. Davidsohn. IV S. 280  
 註廿四、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. Bl. S. 320-321  
 註廿五、Cassiodor Variarum lib. XII, 24  
 註廿六、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, Bl. S. 315  
 註廿七、R. Heynen, Zur Entstehung der Kapitalismus in Venedig S. 122  
 註廿八、H. Sieveking, Aus venezianischen Handlungsbüchern, Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung & Volkswirtschaft. 25 Jahrg. S.1516.

六

之を要するに、ゾムバルト教授が近世資本主義發生の根本條件に對する中心思想は、凡そ巨額の財産なき處に資本的企業は望む可からず、而して中世都市に於ける巨額の財産は地代の集積を除きては他に考ふること能はずと云ふにあり、かくて彼は此統一的な思想を以て幾多特殊の意義を有する歐洲諸國の都市に律せんとせり、斯の如き特殊の現象の普遍化と、資本の非人格的説明とは、ゾムバルト教授をして、何等現實界に求むること能はざる、一種の物的史觀の蜃氣樓を吾人の前に出現せしむるに至れり、遮莫彼が所論の生硬と矛盾とは、吾人をして尙ほ彼は將來發達するものなりとの希望を抱かしむ、吾人は此希望が將來に於て充たさるゝの日あらんことを祈るものなり。(六月十五日、細雨霏々たる朝脱稿)

貨幣數量説に關する諸説

神戸正雄

目次

緒言

(一) 貨幣數量説の肯定説

- (a) 貨幣數量を以て物價決定の直接原因とするもの
- (b) 貨幣の數量に商品の數量を對置するもの
- (c) 貨幣の數量に貨幣の需要を對置するもの
- (d) 貨幣數量を以て物價決定の間接原因とするもの
- (e) 貨幣數量の變化が貨幣の價值評定を通過して物價に影響するもの
- (f) 貨幣數量の變化が商品に對する需要の變化を通過して物價に影響するもの
- (g) 貨幣數量の變化が金利を通過して物價に影響するもの
- (h) 貨幣數量の變化が金利の外に企業の景氣を通過して物價に影響するもの

貨幣數量説に關する諸説

- (e) 貨幣數量の變化が金利と商品に對する需要とを通過して物價に影響するもの
- (f) 其他四説
- (は) 貨幣數量の物價決定上の影響を場合により異るとするもの
- (a) 貨幣の向けらるゝ商品の種類により影響を異にするもの
- (b) 貨幣の向けらるゝ人の種類により影響を異にするもの
- (c) 貨幣の向けらるゝ市場の種類により影響を異にするもの
- (d) 市場の種類と商品の種類とを結合するもの
- (い) 貨幣數量の物價上の影響を否定せざるも別に他の條件の並存を要するもの
- (ii) 物價が貨幣の數量を左右し、貨幣の數量が物價を支配するに非ずとの説
- (iii) 物價を左右するものは貨幣の數量に非ずして經濟上の景況なりとの説
- (は) 信用經濟に於ては貨幣數量説の效力なしとの説

結言

(二) 貨幣數量説の否定説

緒言

理論經濟學に於て異説を生じたること貨幣の如きは稀に、貨幣論に於て異論の行はるゝこと貨幣數量問題の如きも稀なり。貨幣に關し特に貨幣數量に關する論争の喧しき今の我國に於て此に吾人が聊か之に關する諸説の梗概を紹介し併せて多少の批評を試むるも、敢て無用に非るべし。但だ吾人の本問題に關する研究日尙ほ淺きの故に、綜めて精ならず、分ちて明ならざるの嘆あるを憾とするのみ。仍ち吾人は先づ貨幣數量説の肯定的諸説を擧げて然る後否定論に移らんとす。

(一) 貨幣數量説の肯定説

- (i) 貨幣數量を以て物價決定の直接原因とするもの
- (a) 貨幣の數量は商品の數量を對置するもの

一口に貨幣數量説といへども、實際此に屬する諸子の説は一様に非ず。或は貨幣數量を以て物價決定の直接原因と爲し、或は之より或中間物を通過して間接に物價に影響すと爲す。更に前者の中にも或は貨幣の數量に商品の數量を對立するあり。或は或他のものを對立するあり。貨幣數量説の最正系を傳ふるものは

即ち貨幣の數量に商品の數量を對立するものならざるべからず。斯の如き説も亦た實は古來幾多の變遷を遂げて粗なる形式より益々複雑精巧なる形を探ることとなるものなり。

此正統的數量説の最粗なる形に於けるものは恐らくは一五八八年に於けるダ  
リンザッチの説なるべく、彼の説は全貴金屬量は全商品量に均し。貴金屬商品兩者の全體が相均しき如くに此兩者の部分も亦相均しといふに在り。隨て其等のもの、交換交通に現出すると否と、信用方便の行はるゝと否と、流通速度の大小如何等を凡へて無視するものにして、到底不満足の説たるを免れず。但だ彼が之を主張したる、當時の如き經濟界の發達狀態に於ては幾分か恕すべきの點なきに非ず其後ボーガンに至つては彼の説を襲ひたるも、ロックに至りては貴金屬の額に於て流通界に出づるものゝみを考察することゝなり、且つ流通速度をも考察することとなりて一段の進歩を遂げ、更にモンタナリが右の實際の流通に存在する分量に限ることを獨り貨幣の方面に於てのみならず、商品の方面に於ても爲しヒュームも此に従ふは勿論のこと、尙ほ其上に貨幣の量を信用證券にも擴張したるが如し。

唯た流通速度は之を考察することを忘却したり。其説は齊しく上記の三點を考察する所なり。フィッシャーの數量説の如き即ち此等を考察して精巧なる發達を遂げたるものなり。彼の數量説につきては既に河上高城諸教授の精細なる紹介ありたるにより、今敢て此に省略に従ふと雖も、尙ほ一層の改良を要する點あることは此に明言するを憚らざる所にして、此の點につきては敢て他日を期して詳説せんとす。

たゞ斯の如く數量説が漸次發達改良に向ひつゝあるに、新しき處に於ても尙ほ全く機械的なる古き數量説に歸らんとするものあるは奇と謂ふべし。即ちジムメルが其一九〇〇年の著書に於て説けるもの是なり。彼が此に於て説く所に依れば凡そ測定に二種あり。一は直接の測定にして、測定さるべき物と測定すべき物とに品質の同一の存する場合なり。他は間接の測定にして、測定さるゝ物の割合が測定物の割合に反射するにて足るといふなり。而して貨幣の價値尺度機能は全く此後の種類の測定作用に外ならずとし、全商品の在高と全貨幣の在高とを對立して、此に倚屬關係を假定するものなり。即ち各箇の商品は全商品在高(a)の

一部  $\frac{1}{m^a}$  にして、全貨幣量 (b) の此各箇商品に該當する部分は  $\frac{1}{m^b}$  に外ならず。a b m にして既知數なるときは貨幣が固有價值を有すると否とを問はず商品の貨幣價格は定まるといふなり。此思想は實に餘りに機械的にして殆どダヴンリチの昔に歸れるものといふべし。

(b) 貨幣の數量に貨幣の需要を對立するもの

前者と似て非なる數説量は貨幣の數量に貨幣の需要を對立するものなり。即ち貨幣の在 high が其需要を越ゆることゝなれば、貨幣價值下り、貨幣の在 high が其需要に充たざるに至るときは貨幣價值上ると爲すなり。ヘルツカ、ワルラス、ボーリョー等の説く所なり。此説は前の商品の數量に對立するものゝ著しく機械的なるに比して大に進歩したるものなるが如きも、實際所謂需要なるものが可動的なるのみならず、特に其の將さに定めんとする貨幣價值を離れて存在すべからざるものなるの故に、説明としての價值なきものと謂はざるべからず。

(ろ) 貨幣數量を以て物價決定の間接原因とするもの

(a) 貨幣數量の變化が貨幣の値評定を通過して物價に影響す

とするもの

前説を採る者が貨幣の數量を以て直接に物價上の影響を定めんとするに反し、貨幣數量より貨幣の價值評定に及び、更に物價上の影響を説けるあり。ポードンの如き然りとす。即ち貨幣の分量の増加するに従ひては、貨幣が益、低價に見積らるゝことゝなり、其の分量の減少するに従うては益、高價に見積らるゝことゝなるといふなり。一部はピュシニ、フリーブランドも之れを採りジードの如きは貨幣價值を定むる所の元素は分量に係る所の貨幣の效用なりといへり。多少此流を汲むものといふべし。然れども貨幣の絶對量の増減が直ちに貨幣價值に影響すべしとは信ずる能はず。恐らくは商品及其運轉量に對する貨幣及其流通量の相對的増減が之に影響すと見るを至當とすべく、此も亦直接に貨幣價值に影響するに非ずして、寧ろ斯の如き情態が商品の需要を増減することによりて貨幣價值及物價水準に影響すと見るを至當とす。

(b) 貨幣數量の變化が商品に對する需要の變化を通過して物價に影響すとすもの

物價に影響すとすもの

前説が貨幣數量の變化の直接の結果を貨幣に於て求むるに反し、此説を採る者は斯の如き直接の結果を寧ろ商品の方に於て求むる者なり。例之パーシエの如し。彼は貨幣と商品とが直接に對立せず。慾望の増減といふ中間物ありとするものなり。彼は曰く流入する所の貨幣は一定の商品の方への一層大なる需要を生ぜざるべからず。斯くて生産及商業の擴張に刺戟し、此が結果としては物價の上騰が想像し得べし。然し此が結果は必然的に非ず。若も尙該國にして發達能力あり又は外國より貨物を買取り得るに於ては物價は上らざるべく、若も外國交通が遮斷せられ、及び内國に於て何等新可能が発見せられざる時は物價が上騰すべしといふなり。ナッセも亦た貨幣の増加は唯だ商品の方への需要を増加することによりてのみ物價を上騰に齎らすといひ、ウィーベも亦貨幣在高の單なる増加は唯だ市場に於ける新貴金屬が商品の需要を増加せるときにのみ物價を上騰せしむることを得るものなりといへり。此説は貨幣數量説を無視することなくして適當に其説の機械的觀察の弊害を救済するものにして、吾人も亦之を採らんとする所なり。實際貨幣は主として交換に用ゐらるゝものなれば、其數量の増加したる

ことが直ちに貨幣價值に影響すといふは當らず。増加したる貨幣を所持する者が以前よりも多くの商品を需要せんとするに至つて初めて貨幣價值に又は物價に影響するものといふべし。其の直接消費財に向ふや、將た資本財に向ふやは時處の事情によるものにして一概にいふべからず。又斯くて生産の擴張を刺戟したる結果として物價を再び下落せしむることあるは固より無視する譯に非ず。固より又此刺戟が果して物價を下落せしむるに十分なるやは其時其處の事情に係はるものといふべし。

(c) 貨幣數量の變化が金利を通過して物價に影響すとするもの  
前者が貨幣數量の變化より貨幣と商品との對立關係を見て物價に及ぼす影響を議するに反し、此に擧ぐる論者は寧ろその貨幣の商品に對立するに至る前の經過に着眼して貨幣對商品の關係及現象は其結果に過ぎずといはんとするものなり。即ちハインは貨幣の分量は直接に物價に影響することなし。唯だ金利に影響することによりて間接に影響するに止まるといふなり。而して其所以は商品交通に於ては卸賣にても小賣にても貨幣にして信認を繋ぎ居る以上は、何人も貨

幣の分量如何といふことに注意せざる所なればなりと。即ち金利の高低あるに  
よりて初めて其の覺知する所となるといはんとするなり。更にヘルフェリッヒも亦  
増加したる貨幣供給より割引歩合の低下となり、更に物價上騰となることを推論  
す。尤も彼は此に附説して、曰く利子の低下が直接に企業の新設擴張を有利とす  
るのみならず、此によりて生ずる貨幣流動性の増大が有價證券の價格を上ぼし有  
價證券への需要が増加して此によりても益々事業の新設擴張を刺戟することゝ  
なるべし。然乍ら此生産擴張の眞實の基礎を缺く所にして、商品の方への實際の  
需要が之に相當して増加せざるの故に生産過剰が容易に起り得べしと。其他メ  
ーヨースミスも亦た新なる金の分量が我國に入り銀行に預金となるときは、銀行  
が輕易なる條件にして割引するの傾を有し企業者は其企業を擴張すべく隨て商  
品及勞働を一層多く需要して之を上騰せしむることゝなるといひベリ、ムルハル  
トも貨幣供給と商品願望との間に利子の中間物を入れ、ツーク、ニューマーチは特に  
短期貸付資本利子即ち割引歩合を入るゝものなりヒルデブランドの如きは根本  
的には貨幣數量説に反對する所なれども貨幣の過剰及缺乏は先づ常に唯だ爲替

相場及銀行利率に影響す。時が十分なるときに商品價額に影響することゝなる  
といふも稍同一の意味をいひ表はすものなり。

右ヘルフェリッヒが言へる金利低下の企業に及ぼす影響更に其反動として物價  
の下落を生ずべき危険につきては洵に尤もなることなれども、兎に角貨幣の膨脹  
隨て金利の低下が事業の膨脹を促し、物價上騰を齎らすことは争はれず。然れど  
も果して貨幣の膨脹が貸出の方法にのみよりて流通界に現はるゝや、又其貸出に  
よりて流通界に現はるゝ場合にも金利の引下によりてのみ現はるゝやには疑あ  
り。實際貨幣の膨脹は政府の在外正貨輸入の如きによりても生ずることあり。  
又銀行も事情によりては金利引下を行ふことなくとも貨幣を一層多く流通界に  
出すことを得る所なれば、貨幣數量の變化が常に金利を通ほして物價に影響すと  
いふは當らず寧ろ前にいへるが如く貨幣數量の變化より商品に對する需要の變  
化を推理して物價騰貴を判斷するの穩當なるに如かず。然ればランドマンは低  
き利率が必ずしも流通方便の増加と伴はず。流通方便の増加は寧ろ當時の營業  
状態に係るといふなり。如何にも貨幣の分量の増減が通例金利の上下に伴ふこ

とは認むべきも此あるが故に貨幣分量の變化が常に金利の上下を通ほして物價に影響すといふは不當なり。又金利の上下あるに非れば、分量増減の覺知明かならずといふも當らず。實際貨幣を所持することゝなれる各人が其把持する貨幣の分量の増減によりて、假令地方に金利に高低なしとするも、商品に對する需要に大小を感ずるに至るは決して否定すべからざる所なればなり。勿論利の大小が其需要の強弱の上に無關係なりといふには非ず。

貨幣數量と物價との間に金利の中間物を認むる學者の中にて特段なる態度を持つるものをウイグセルとす。彼は貨幣又は信用が擴張さるゝときは貸付利子が自然的資本利子よりも小となり、然るときは企業者が利得し、生産擴張が生じ、勞働及其他の生産力の方への需要増加が生じ、物價は上騰すといふなり。而して彼は此自然的資本利子に於て實物資本が貨幣の媒介なくして實物にて貸出さるゝときは需要供給によりて確定さるべき利子歩合を解するものにして、即ち彼は貨幣と物價との間に貨幣の供給に係る所の貸付利子と貨幣の運動より獨立したる自然的利子と貨幣の運動より獨立したる自然的利子とを置くものなり、彼は又此

議論に於て完全なる信用經濟を擬制し、各人が小切手勘定を銀行に有して鑄造貨幣又は銀行券流通が不要となり、凡べての支拂が振替及書替によりて行はるゝことを假定し、更に此の如き制度の下に銀行が自主的に貸付利率を決定することを得、貨幣の供給が十分に其需要に適合し得ることを前提せり。然れども斯の如き状態は尙未だ現實に遠かる所にして、信用に據らざる取引は頗る多く、假令其の信用によるものと雖も、貨幣資本の供給が其の孰れの需要をも充たすといふことは事實に反し、又銀行が其利率を定むるに於ては經濟上の狀況によること多く、特に正貨準備即ち貴金屬準備の信用額に對する割合に顧慮すること少からず。其順なるときは割合歩合を引下げ、其逆なるときは之を引上げるの餘儀なきに至ること明なり、銀行が利率を自主的に決定すといふも或範圍を逸出することは難し。故に彼の説の前提に於て疑はしき者あるのみならず、貸付利子が所謂自然的利子よりも小となるが如き場合に、生産擴張の傾向を生じ、隨て物價を上騰するの傾向を生ずることは確なりとするも、此利子を通ほさゞれば物價騰貴を生せざるもの非ること并に生産擴張は結局に於ては又物價下落の傾向を生せざるべからざる



140 こと前に説く所の如しとせば、吾人は未だ卒かに彼の説に賛する能はざるものなり。

(d) 貨幣數量の變化が金利の外に企業の景氣を通ほして  
物價に影響すとするもの

前に擧げたる説が貨幣と物價との間に殆んど専ら金利を入るゝに反し、此に擧ぐるの説は此以外に景氣をも入れんとするものなり。尤も此は説明の工合の差異に止まり、必ずしも前説にても全く景氣を等閑視するといふには非ず、或は寧ろ前説と此説とを一括して擧ぐるも可なり。本説に屬するは例之ラブレの如し。彼は曰く貨幣供給の増加は先づ利率を低下し、此が生産擴張を刺戟し好景氣を進め、以て物價を上騰せしむべしと。バンベルガー、コナントも略ぼ同様に考ふ。その他フラーは曰く正貨準備の急激なる増加によりて割引歩合が下り銀行券流通は擴張すべし。此銀行券流通が出貨準備に割合せて餘りに大なるものとなるときは利率が上り、此方策によりて流通交換方便量が減じ金が引付けられ、生産が困難となり、逼迫賣却となりて爲めに物價の下落を齎らすと。フイリップポグイチモ亦

た貨幣量の減少は貸付に應すべき貨幣準備を減少すべく、之によりて貸付利子は上り、生産は高められ、企業心及購買力は下り、生産者の逼迫賣却及消費者の需要缺乏の爲めに物價下落の傾向を生ずといひ、更にハリソンも亦た貨幣は貸付資本の最自由なる形を成すものなるが、之が補充の或原因より遮断せられたるときは、銀行は銀行手許在高の消失を避けんが爲めに利率を高むるの必要に迫まらるべく、其直接の結果は投機及企業心の制限にして、更には從來よりも一層少數の人のみが借入を爲し得るが故に沈滞及び物價瓦落となり、斯くて物價が低處に止まりて、流通貨幣の分量が適當となるといふなり。

141 然乍ら此説に對しては貨幣の増減は必ずしも金利を通ほさずして物價に影響することありといふ前説に對するの非難の外貨幣の増減隨て生ずる金利の上下が果して謂ふ所の如き好景氣不景氣を伴ふや否や、金利の上れるとき必ずしも常に好景氣に不景氣乃至逼迫を伴ふと限らざるべく、金利の下れるとき必ずしも常に好景氣を齎らすと限らざるべし。金利の上れること、好景氣と相伴ひ金利の下れること、不景氣と相伴ふことあるべく、その好景氣となるや不景氣となるやは寧ろ一

般經濟上の地位に係ること多く、貨幣によることありとも、其は寧ろ助成原因たるに止まること多かるべくその單獨に影響すとせば寧ろ小なる影響を及ぼすに過ぎざるべし。然ればヘルフェリッヒの如きは一般經濟上の地位によりて條件せらるゝが如き割引歩合の大動搖と貴金屬運動の生ずる所の小なる其との間に區別を爲せる所なり。加之利率の低下には他の一面に於ては生産費の減少、生産の擴張競争の激甚を齎らして物價低下を生ずるの可能も之ありとせば、此よりして常に物價騰貴を生ずるものと推論するが如きは必ずしも當らざるの議論といふべし。

(c) 貨幣數量の變化が金利と商品に對する需要を通ほして物價に影響すとするもの

以上の外、學者の本問題に關する特段なる觀察少からず中に就きグイチ、マルコは新金屬の流入は銀行準備の大きさに影響し、之を需要以上に擴張し、隨て之を低價と爲し、割引歩合及利子が下ることゝなり、之に對して得られたる銀行券に對して一定の財に對するの需要が高められ、之に應じて物價が上騰することゝなるべく、同

時に賃金も亦上騰することゝなるべし。此よりして更に需要が國民經濟の他の範圍に及び斯の如くにして遂に全區域が支配せらるゝことゝなるべしといふなり。是れ即ち前の説を別異の詞を以て説明したるものに外ならずして、前説に對して爲されたる非難は總て此説にも準用せらるべし。

(f) 其他

一、シムリングは今日に於ける金の増減は銀行に於ける金の分量に現はれ、此分量は二様の働を成す。即ち一部は銀行券發行の基礎を増すことゝなり、他部は静止資本を増加することゝなる。二の機能は分別すべく、其の物價に影響するは前者によりてなりといへり。説明の様式は異れども結局は上來説ける所と同一に歸着するなり。

二、更にクラインウエヒターは金に於ける増加は一層大なる消費及生産を促し、斯の如くにして所得が高まり、一層大なる貯蓄が行はるゝことゝなり、資本が集積せられて利子が下り、此により又生産が擴張に刺戟せらるゝといふなり。此説は上記普通の説が貨幣の膨脹が先づ利子の下落を伴ひ、然る後生産等の擴張となり物價

144 に影響すと説くに反し、先づ生産等の擴張が起り、然る後資本の集積を生じて利子が下り、更に生産擴張の刺激を爲すといふなり。蓋し彼の説は前記普通の説の足らざる所を補ふには足ると雖も、而も貨幣増加の結果が常に彼の説の如くなるものと解することは能はず。

三、更にゾンバルトは増加したる金の生産が一層大なる貨幣流動性を齎らし、隨て債券が起され、更には債券が借換へられ、又は償還せられ、隨ては資本の集積が生じ、銀行と信用とによりて、好景氣に導く所の更なる影響が生ずと。是れ確に一の觀察點たるを失はざるも、之を以て貨幣膨脹の全結果と爲すは當らず。

四、上記諸説よりも全く獨立したる觀察はウァーサーの説なり。彼は貨幣價值變更の可能を三の方面より行はると爲すものにして、即ち貨幣の方よりと商品の方よりとの外に、第三に貨幣經濟への移轉といふことを擧ぐる所なり。即ち貨幣經濟が發達せんとして、あるだけにては貨幣と商品との反對が初めて發達することによりて貨幣價值に變更が生ずといふなり。然し斯の如きは夫の貨幣の漸く發達せんとする時代は兎に角、今の文明國の如き發達程度に於て斯の如きものが

幾許の重要を有するやは殆んどいふに足らざる所なるべし。

(は) 貨幣數量の物價決定上の影響を場合により異とするもの

(a) 貨幣の向けらるゝ商品の種類により影響を異にすとするもの

貨幣分量が直接に物價に影響すと爲すと間接に影響すと爲すとを問はず、其物價上の影響が場合によりて異なるといふことを説く者あり。此説は確に多少の眞理を有す。唯だ此説にも種々あり。中に就き貨幣の向けらるゝ商品の種類によりて影響を異にすといふことを主張するは例之ウァーサーの如し。彼は先づ貨幣在高の増加が物價を上騰せしむることを得るは、其商品需要を増加せるときのみなることを前提とし、更に貨幣を得たる人の願望が容易に増加すべき財に向けらるゝや、増加することの困難なる財に向けらるゝや、全く増加すべからざる財に向けらるゝやによりて結果を異にすべく、前なるは後なるよりも物價に及ぼす影響輕微ならざるべからずといふなり。斯くて彼は貨幣が何人の手に達するかによりて結果が異なる何となれば種々の國民階級が異りたる商品の需要を有すればなり

といふ所なるが、實際に就きて此が區別は必ずしも明瞭ならず。唯だ貨幣が生産者の手に入り随て原料の購入勞力の需要随て生活材料の購入に向けらるゝに於ては物價上の影響は大に、純然たる消費者の手に入り随て製造品の購入に向けらるゝに於ては物價上の影響は小なるが如きも消費者も其貨幣を一部は食料品の如き生産増加の困難なる物に向け、出産者も機械の如き生産増加の容易なるものに向くる所なれば、必ずしも貨幣の入る所の人のみを見て一概に判斷すること能はず。唯だ容易に増加すべき財に向けらるゝや、其の困難なる財又は絶対に増加すべからざる財に向けらるゝやによりて影響の異なることは確なり。

貨幣の向けらるゝ商品の種類によりて影響を異にすといふ説の他のものは商品の間に影響の先後の關係を立つるものなり。例之コナントの説の如し。彼れは金に對する需要の擴張が金準備を減少せしめ随て割引歩合を引上げしめ、先づ有價證券の價格に影響し、更に容易に輸出すべき商品の價格に影響し、終りて他種の財の價格に影響すといふなり。益割引歩合の上騰の結果は或る財の所有者生産者をして金に換へんが爲めに下りたる價格にて輸出することを餘儀なからし

むるに因るなり。而して其最も容易なるは有價證券なり。此説にも一應の道理あり。或はロツツが新に生産せられたる金によりて生せられたる一層大なる貨幣の流動性が新債の起債に刺戟すといふは即ち前説の反面を語るものにして、貨幣膨脹の影響が先づ有價證券の價格に反響すといはんとするものなり。或は又パ  
ーシエの如きは新なる金の物價上の影響を商品に對する需要の擴張によりて認むるものなるが、特に先づ精製品への需要次に原料品への需要の擴張によりて現はるといふなり。然れども實際上新生産の金は多くは銀行の働によりて銀行利率の低下を齎らし生産の擴張を生ずることゝなるべく、先づ原料品の價格を上し然る後享樂に熟したる精製品に向ふこと多かるべし。

(b) 貨幣の向けらるゝ人の種類によりて影響を異にすとするもの

前記ウィーへは一面貨幣の向けらるゝ商品の種類によりて影響を異にすといひ其に關聯して貨幣の向けらるゝ人の種類によりて影響の異なることを説きたる所なるがカンチオンは専ら何人の手に先づ新獲得貨幣が達するや此が商品の需要

148

を高むるや否やに係るといへり。例之貨幣が先づ浪費者の手に入るや將た生産貯蓄者の手に入るやによりては確かに影響異なるべし。前者は確に直接に需要を高めて物價を上騰せしむべく、後者は結局或種の財の需要を高むることゝなれども間もなく供給増加を伴ひ又は供給補充を伴ふものなれば、此點に於て物價上騰の結果を生ずること輕しと爲す。

(c) 貨幣の向けらるゝ市場の種類によりて影響を異にすと  
するもの

貨幣の向けらるゝ市場の種類によりて影響を異にすとするものは例之スピートホックの如し。彼は貨幣が先づ資本市場に向けらるゝときは物價上の影響は間接なるも、商品市場に向けるときは直接なりと爲すものなり。彼は先づ輸入されたる金が何處に達するかを注意せざるべからずと爲し、此が私人資本を成す所の資本財に對する對價(貸付資本の元利)なるときは資本市場に影響すべく、之が供給されたる商品に對して(對價として)輸入されるときは商品及勞働市場に影響すべし。此場合にも一部は通例資本市場に入るべく、其の如何なる結果を資本市

149

場に生ずるかば國民經濟の一般の情勢に係るといふなり。(此に關してはニコーマ  
ーチの説明あり。曰く英國は重なる工業國として諸多の國々の原料品を持來りて加工を施して享樂に熟したる終局産物と爲すなり。然乍ら斯の如き産物は金産國よりしては主として其貴金屬に對するの交換に於て要求せらる。此故に余は先づ英國に來り、此處より更に原料供給國に行くなり。此際英國商品への上る所の需要及び均しく原料への上る所の願望が物價を刺戟することは自明也)如何にも金の流入が商品の對價として入れりや資本の對價として入れりやによりて物價上の影響に多少の差異あることは認めざるべからず。然れども今日の如く銀行信用の進める時世に於ては假令金が商品の對價として輸入さるゝ場合と雖も先づ銀行に入りて準備の増加となり、資本市場を潤し、然る後商品市場に商品及勞働の需要となりて現はるゝことを寧ろ通例とすべし。尤も右の場合にも此の如く資本市場に隨て商品市場に影響する以前に金流入と相伴うて(又は金の流入よりも前に)其國商品の方への外國よりの需要の増加によりて其國に於ける商品市場に影響することは見逃がすべからず。然し此は一國に於ける貨幣膨脹の

結果として生ずる所の物價上の變動には非ず。而して又政府の輸入する場合の如きには貨幣が資本市場を通ほさずして直ちに商品市場に對する需要の増加となりて現はるゝことあるべきを忘るべからず。

右と類似の見解なれども多少獨得なるはローンなり。彼は貨幣の三分説より出發するものにして、彼に依れば先づ貨幣を分て三とす。曰く資本貨幣、曰く所得又は購買貨幣、曰く業務貨幣、是なり。資本貨幣とは各種の貯藏貨幣にして放下を求むるの資本を意味し、業務貨幣はつまり所得預金通貨に該當し、所得又は購買貨幣とは人民の純所得たる貨幣にして之が一部は蓄積せられて資本貨幣となり、資本貨幣が基礎となりて業務貨幣の増加となるといふ也。而して資本貨幣の増加は利子歩合の低下となり、生産の増加及競争の激甚となりて物價の下落を齎らすべく、所得貨幣の増加は消費物に對する需要の増加となりて物價の上騰を齎らすべし。而して業務貨幣は資本貨幣よりも所得貨幣よりも影響を受けるの故に、物價に對するの影響は中立的なり。隨て貨幣の分量の物價上の影響如何の問題は資本貨幣の範圍と所得貨幣の範圍との相對的の増加の割合如何にあり。而して

更に銀行より發行さるゝ紙幣及銀行信用貨幣は資本貨幣となり、内國にて新に産出せられたる金及外國より新に輸入せられたる金并に政府より發行されたる紙幣は所得貨幣となるといふなり。彼は其説を合衆國に於ける實例によりて證明せんとせり。即ち一八八〇—一九三年の時期と一八九七—一九〇二年の時期とに於て孰れも營業が繁榮したるも、物價は前の時期には下落し、後の時期には上騰せり。之が原因は前の時期には利子歩合の下落傾向を示せるによりても明なるが如く、資本貨幣區或に於て所得貨幣區域に於けるよりも相對的の過剰の存したるにより、後の時期には利子の上騰によりても明なるが如く、資本貨幣の缺乏が存在し、然乍ら國民の購買貨幣が著しく擴張したるに在り。然し乍ら彼のいふ貨幣の三分は聊か明確を缺くの觀念たるを免れず。或は又たヘルフェリッヒの如きは増加したる貨幣供給より割引歩合の低下となり更に物價上騰となることを推論すると同時に此が卸賣市場に於て小賣市場に於けるよりも一層感じ易きことを説けり如何にも貨幣分量が割引歩合を通ほして物價に影響する場合には彼のいふ所の如けん。

## (d) 市場の種類と商品の種類とを結合するもの

貨幣分量が場合により物價上の影響を異にすといふ點に於いては吾人は寧ろ先づ此れが資本移轉及單純なる支拂尙詳しくいへば更に價值運送の爲めに出づるや物の購買の爲めに出づるや物の購買の爲めとするも其の果して生産準備の爲めなるや直接消費の準備の爲めなりやによりて決すべきものと信ず。資本移轉及單純なる支拂の爲めに貨幣の出づるは精巧なる貨幣分量説よりいへば除外するを至當とすれども實際交通に現はるゝ貨幣より此等のものを分別することは甚だ困難なるを以て到底之を併せ計算するの外なく隨て又上の如き問題を提起せざるべからざるなり。而して資本移轉及單純支拂の場合には貨幣數量が物價上に直接影響なし。直接には商品と對抗せざればなり。然れども間接には又終局には物價に影響あり。即ち貨幣の資本移轉及び支拂の爲めに出づるものゝ大小は纏て一國の運轉貨幣量の購買に向ふものゝ多少を左右するところとなりて物價に影響すべし。尤も此は極めて一時的の現象たるに止まる。斯の如きは特に所謂節季に於て目撃する所也。特に又資本移轉として出でたる場

合には多くは利子を低下して生産を増長し投機を刺戟して物價を上騰せしめ其結果としては又資本の更なる需要を進めて最早利子を低下せしめざるか又は一旦低下せる利子を更に上騰せしむるの可能あり。然るときは又生産者の金融逼迫賣却を餘儀なくして以て物價を下落せしむるの可能あり。然乍ら前に利子の低下したるときに之が爲めに生産の擴張生産者の競争の激甚となり改良進歩を促し以て物價の下落を生ずるの可能あり。然し斯の如くに物價の下落あるに於ては之が消費を進むることとなりて更に多少物價を上騰せしむるの傾もありとす。支拂の爲めに出でたるもの亦結局は或は商品の購買に向ひて物價に影響し或は先づ資本移轉に向ひ更に其よりして物價に影響することゝもなるべきなり。更らに貨幣の商品市場に出づるものにして生産準備の爲めに働くものは直接には物價上騰に影響すれども結局生産の増加競争の激甚改良進歩の促進となりて物價下落を生ずるの可能あり。直接消費の準備の爲めにするものに至ては全く物價上騰を齎らすといふを至當とす。而も斯の如くにして生じたる物價の上騰も生産を刺戟して物價の下落を齎らすの蓋然もなきに非ず。

## (c) 貨幣數量の物價上の影響を否定せざるも別に他の條件の

## 並存を要すとするもの

此種の説は或は寧ろ否定説に近きが如く、又間接影響説に近きやの感もあり。然乍ら此等のものよりも獨立して肯定説中の特段なるものとして擧ぐるを選ぶべしとす。例之ロツツは貨幣分量の膨脹又は縮少より生ずる影響は否む能はず。雖も此れが常に單に他のもの、傍に一の物價決定原因たるに過ぎずと爲す。他のもの、中に彼は主として生産消費に於ける變更即ち商品の方に於けるものを意味するなり。「ド、イッチェエ、コノミスト」一九〇三年も亦た金の増加は物價上騰に刺戟を與ふといへども經濟生活の隆盛と沈衰とは指導的動機となるもの別に之ありて存す。隆盛に對しては新物品又は舊物品に對する市場の一層大なる收容能力なるものが沈衰に對しては消費を超過したる生産の擴張といふことが其動機を成すといひ、スピートホツツも亦た貨幣増加は物價上騰に導き得ると雖も單獨にて經濟上の好景氣を齎らすものに非ず。何となれば之れが爲めには閑散なる資本の十分なる分量の存在といふことが必要ななりといへり。然し實際物價騰落が單獨に貨幣の分量のみによりても生ぜられ得るものなることは前に述べたる所の如し。

## (二) 貨幣數量説ノ否定説

(v) 物價が貨幣の數量を左右し貨幣の數量が物價を支配するに非ずとの説

貨幣分量説に反對するの説種々あり。其一は物價と貨幣數量との因果關係を以て貨幣數量説者の説く所と反對の關係なりと爲すものなり。例之ヒルデブラントは貨幣價值は寧ろ常に貨幣が商品市場に現はるゝの前に既に與へられたるものなり凡べての種類の財に對する價格決定は全く貨幣よりは獨立して現はるるなり。而して其の斯くの如くにして現はれたる物價の高さは流通に在るべき貨幣の分量の爲めの標準となるなり。流通に在る所の貨幣の量又は先づ貨幣に對するの需要が物價に適應することゝなるべきも、物價が貨幣の分量によりて決定せらるゝものに非らずといひ、マンメリー及ホブソンも亦た商品の物價が貨幣の分量を定め、各箇の商品に對する需要供給が商品價格の上騰を定む。社會に於ける現在貨幣の量額の増減といふ單なる事實は物價の上に影響する能はずといへり。ヘルフェリッヒ(老)に至つては稍穩和なれども、尙ほ物價が貨幣數量を定むるの關係に重きを置くものなり。即ち彼は物價は人が通例假定するよりは一層



156

多く金より獨立したるものなり。物價發達は之よりは獨立に進展して、寧ろ交換方便の需要を定むるなり。貨幣方面は貨幣代用物使用の増減によりてと同時に、流通の擴張及收縮によりて事情の變化に適應隨行せんとするものなりといひ、唯だ此に附説して流通額に於ける相當なる推移の結果として貨幣價值變更の可能は到底否むべからざるも、此は固より實際的の過剩又は缺乏に關せざるべからずといへり。如何にも論者のいふが如く貨幣の數量が物價によりて左右さるゝとあるは否定すべからざる所なれども、而も貨幣の數量も亦た物價に影響するを否定すべからざるなり。吾人は此れ丈けに於て決して分量説を否定すると能はざるなり。前者を重視するの餘り、分量説を全然否定するに至りては過ぎたり。

(ろ) 物價を左右するものは貨幣の分量に非ずして經濟上の景況なりとするの説

貨幣數量説を否定する第二の説は物價を左右するものは貨幣の分量に非ずして經濟上の景況也とするの説なり。但し結局は前の説の反面をいふに外ならずして、之れと説明の方法を異にするに止まる。例之ナッセは曰く現在せる貨幣の分量が物價を決するものに非ずして、全經濟上の地位が之を決するなりと。レキシ

スも亦貨幣價值の變更が金の膨脹の爲めに直接に發生するに非ず。生産及投機の變轉の媒介によりて生じ得るなり。又大なる金の準備が此生産及投機の變轉を獨立に産出するものに非ずして、單に之を助長するに止まると。ビールマーも亦た物價動搖は一般營業狀態に係れども、金流入の大小とは全く交渉せず。詳しくいへば營業狀況及企業心、工業的景氣及全經濟生活の鼓動と密接なる交互影響に立つものなりといひ、但だ金輸入が恰かも物價騰貴運動の際に生じたるときは此が信用の一層の擴張を許し、之によりて物價騰貴を一層永く維持するを許すといへり。如何にも論者のいふが如く物價が一般經濟狀態に係るとは勿論なれども、貨幣の分量が此に影響し以て物價に影響するのみならず、貨幣分量が一般經濟狀態如何に拘らず物價に影響するとも全く之なしといふべからざるなり。

(は) 信用經濟に於ては貨幣數量説の效力なしとするの説

此説はアレントの唱ふる所なり。曰く純貨幣經濟の時代には分量説が實際を反射するも信用經濟に於ては之が效力を失へりと。彼は附説して曰く、交通に取りては全動的資本が其購買力を何時にても表章し得るだけにては貨幣として働くなり。斯くて貨幣は勿論、銀行の與ふる信用、有價證券等も凡べて貨幣として

157

働き得るといふなり。其意斯の如くにして信用の發達せる時代には貨幣として働き得るものは範圍洪大にして屈伸力に富むとなり、貨幣の分量の如きは殆んど物價上に效力を失ふに至るといふなり。然れども實際此等の物の貨幣として働き得るの力には際限あるのみならず、到底結局に於て金の後援を要するの點を顧る時は、全く分量説を否定するとは能はざるべく、唯信用的貨幣が金屬的貨幣よりも屈伸力の大きなるだけに於ては分量の效力の薄弱なるを否定すべからず。

結言

以上要之貨幣數量説は幾多の變遷を経て益々改善の道程に在る所にして、又實際時世の進歩と共に此の如きの改善を要する所なり。フィッシャーの分量説に關する説明の如き多少改善の跡は認むべきも、尙不満足の點なきに非ざるが如く其分量説の説明は決して單純なる機械的説明に據るべからずして、寧ろ心理的の説明を加味するを至當とすべく、又貨幣分量の變化の現はるゝ場合によりて影響の異なることをも認めざるべからざるなり。若し夫れ分量説に對する反對に至りては孰れも多少の眞理を包含するを否認することは能はざれども、而も亦た根本的に分量説を覆へすに足るものあることなきなり。

雜錄

收穫遞減及び遞増の法則と生産力とに就て

増井幸雄

- 一、緒言
- 二、收穫遞減の法則
- 三、收穫遞減の法則は一般的の適用あり
- 四、收穫遞減の起因
- 五、收穫遞増の法則
- 六、收穫遞増の法則は一般的の適用あり
- 七、生産力

一 緒言

物質的生産力に關する法則として「收穫遞減の法則」、「收穫遞増の法則」、并に「收穫恒同の法則」の三者あることは多數學者の説く所、而してこの法則の適用を示したる「農業は收穫遞減

の法則に支配せられ工業は收穫遞増の法則に支配せらる」といふ思想も亦廣く且つ永く行はれ來りたる所にして、舊くは人口論の基礎ともなり、近くは又立國論の根據ともなり居れるを見る。惟ふに農業上に收穫遞減の法則の適用ありといふは事實ならむ、又工業上に收穫遞増の法則の適用ありといふも事實に相違なかるべし。されど收穫遞減の法則は果して農業のみに適用ありてその他の産業には適用なきや、土地の生産力のみに關して成立し而して資本及び勞働に關しては成立せざる者なりや、又收穫遞増の法則は工業のみに適用ありて農業には適用なきものなりや。換言すれば農業は收穫遞減の法則のみに支配せられて復た收穫遞増の法則の作用する餘地なく、工業には前者の作用する餘地なくして全く後者に支配せらるゝものなりや、大に疑なき能はず。否、予は收穫遞減の法則も收穫遞増の法則も之を根本的に考ふるときは共に生産